

俳句、短歌、川柳、現代詩、それぞれの「ジャンル」（古めかしい言葉だ）によって詩的深化の捉え方が大きく異なる。詩人には高く評価される高度なレトリックも、歌人には嘘っぽいものに見えたりする。先日の選考会ではそのギャップのようなものについて大変考えさせられた。そのなかで少しずつ私なりの「口語詩句」が見えてきた感じがある。もちろん定義はまだない。互いを隔てる「壁」などそもそもないのかもしれないけれど、だからこそ「口語詩句」はいまだ過激なものとしてかかやいている。

高田皓輔 十二支に入れなかった動物の／話をしてもしようがないから

「話をしてもしようがない」という投げやりな感じがおもしろい。呆れているのでも、ばかにしているのでもない。つまり感情ではない。体温のようなものが言葉の姿をしている。

ムクロジ 自転車で踏んで蛇かもしれない

「しれなくて」の余韻が秀逸だ。通り過ぎてしまった、という事後をひきずるところに蛇の長さが繋がっていて、とてつもなく長い車輪跡が道の上についていく。

川上 真央

黒鍵を押しこむような／はげしさを／灯し／あなたは無言を選ぶ
半夏生ざわさわ満ちる／日盛りの／人影にふとあやうい淀み

改行にたしかな意味がある。何も言っていないはずの空白の部分に言葉が溢れている。

雲理そら

さわれない花から順に水をやる

さわれないことへの代償として水を先にあげるのだろうか。さわることと愛が予め結ばれていることに安堵する。

マジックの種を明かして帰るたび／あなたの部屋が遠くなるよう
知ることのさみしさ。知らないことの豊かさ。言葉のバランス感覚が魅力的だ。

うたた

迷い一つ惑い一つ飛ぶ蟬がいて／すべてのものはめいわくらしい
山盛りのカレーひとりで平らげて／夢を叶えることはくるしい

心に残るリアリズム。異なるおもさの言葉が等しくまざりあっている。

つぎの作品も優れていた。松下誠一さんは相変わらず一捻りのパワーがすさまじい。互井宇宙論さんは巧緻な音韻で魅惑的な世界をつくっている。

松下 誠一 サザンカの為にならなくとも笑う

互井宇宙論 かわるがわるかるがもに魔術

互井宇宙論 雅歌だけで育つ鸚鵡に騙される

なお、選外だが、「切りたての桃に子犬の息速く」（彩燈琴璃）、「名画見る時／その一色目の絵の具を／いつも妬んでいる」（蛙多楓太）も印象に残った。それでは皆様、これからもどんどん自由に書いてください。